

発達障害児の社会適応とオーケストラ

—ベネズエラの音楽教育、エル・システマから考える—

金 井 彩 音

目次

はじめに

1. 発達障害児と「違い」
 1. 1 発達障害児が「違う」とは何か
 1. 2 「違い」克服の鍵とは

2. オーケストラ
 2. 1 オーケストラでできること
 2. 2 発達障害児とオーケストラ

2. 音楽療法
 2. 1 音楽療法について
 2. 1. 1 音楽療法の定義
 2. 1. 2 日本における音楽療法の実際
 2. 2 創造的音楽療法から考える

4. エル・システマ
 4. 1 エル・システマについて
 4. 1. 1 ベネズエラとエル・システマ
 4. 1. 2 エル・システマの組織と成立
 4. 2 エル・システマから考える
 4. 3 日本で行うエル・システマ

5. 発達障害児の社会適応とオーケストラ

おわりに

参考文献

はじめに

筆者には発達障害の弟がいる。弟の障害は軽微だったので、普通学級に通っていた。周囲とうまく馴染めない発達障害児の多い中、弟は大きな挫折も無く大学生になり、幸い周りに恵まれてきた。それでも、思春期に受けたいじめは耳を疑うようなひどいものであった。原因は、発達障害に特有の「周囲と違う」ことである。コミュニケーションが苦手でも、いずれ社会に出ることを考えると避けて通れない。どうにかして、「違う」ことを乗り越えたコミュニケーションは可能にならないものか。私は、今までの学校ではない新しい形で、発達障害児と健常児が交流する場所が提供されるべきと考えている。

健常児と弟のような発達障害児とのコミュニケーションを媒介するものとして、私は音楽が最も適当であると考えている。なぜなら音楽は非言語のコミュニケーションであり、発達障害児の苦手とする言語のコミュニケーションとは別種のコミュニケーションであるからだ。何より音楽は団体として組織することが容易である。筆者も10年前からオーケストラで演奏しているが、個人よりむしろ団体に演奏することに意味があると思っている。50人いても作っている音楽はひとつ、という特異な状況下での非言語コミュニケーションは、子供たちの関係に何らかの影響を及ぼすはずである。そこで当稿では、オーケストラを用いた発達障害児・健常児間のコミュニケーションの有り方について考えていく。

グループで行う音楽は、「音楽療法」ですでに実践されている。音楽療法は、発達障害者や精神障害者、認知症患者に音楽を用いて訴えかけ、症状の改善を促す治療である。音楽療法にもさまざまな種類があり、中にはグループで行うものもあるが、筆者はこれに懐疑的な立場である。音楽療法は福祉の範囲内でのみ行われ、発達障害児・健常児相互のコミュニケーションを問題としづらいからである。福祉の範囲から抜け出せない音楽療法とは異なった方法でオーケストラを組織していくことを考えたい。

ここで参考にしたいのはベネズエラの「エル・システマ」という音楽コミュニティである。エル・システマは、治安が悪く貧しいベネズエラの子どもたちに無償で楽器を与え、オーケストラ活動を通じて非行から救うという試みである。エル・システマで学んだ若者で構成されるオーケストラは非常に質の高いオーケストラで、世界で活躍する演奏家も輩出するほどである。障害と貧困というレイヤーの違いはあるものの、音楽を団体、社会生活から捉える点で、エル・システマは私の理想と合致する。よって本研究では、エル・システマをヒントに、オーケストラを用いた発達障害児・健常児間のコミュニケーションの有り方を考えていく。

具体的な研究対象は、日本における音楽療法ならびにベネズエラで行われているエル・システマの実態である。また、福島県相馬市に輸入されたエル・システマの取り組みについても言及する。研究は、本・インターネットを用いて行う。また、フィールドワークとして、音楽療法士、エル・システマ関係者、エル・システマジャパンへの聞き取り調査を行う。

本稿の構成は、1章で発達障害児を取り巻く現状の何が問題か、何が必要とされているのかの見解を述べた後、2章でオーケストラを用いた解決法を考え、3・4章でそれぞれ音楽療法、エル・システマという既存のアプローチを分析、以上を踏まえて5章でオーケス

トラを用いた発達障害児・健常児間のコミュニケーションの有り方を結論付けるとする。

1. 発達障害児と「違い」

1. 1 発達障害児が「違う」とは何か

前書きで発達障害児が「周囲と違う」と述べたが、具体的にどのように「違う」のか、私が何を問題意識としているのか述べていく。まず、発達障害について厚生労働省のウェブサイトで書かれている字句を引用する。

発達障害はいくつかのタイプに分類されており、自閉症、アスペルガー症候群、注意欠如・多動性障害(ADHD)、学習障害、チック障害などが含まれます。(中略)典型的には、相互的な対人関係の障害、コミュニケーションの障害、興味や行動の偏り(こだわり)の3つの特徴が現れます。¹

発達障害とは共通して対人関係に困難のある障害であるが、様々なタイプがあり、広範な概念であることが上記よりわかる。では、なぜこのような広範な概念になったのか、発達障害という概念の成立から見ていくため、以下に石川憲彦・高岡健「発達障害という希望—診断名にとらわれない新しい生き方」(雲母書房、2012)より引用する。

発達障害支援法²ができる以前に、「発達障害」という診断名があったわけではありません。この言葉が登場した1970年代当時のアメリカでは、脳性麻痺、知的障害に加えて、てんかんを発達障害と呼んでいたのですが、のちに自閉症も含まれるようになりました。(中略)ところが日本では、1990年代から、先ほどの「高機能」³と同じ意味での「軽度」発達障害という、ナンセンスな概念の導入によって流れが変わってきます。そして、2000年代に法律で「発達障害とは……」という定義が出てきました。その中には、「自閉症」「アスペルガー症候群」「広範性発達障害」「学習障害(LD)」「注意性欠陥多動性障害(AD/HD)」などが含まれるとされたのです。(中略)ちなみに、発達障害支援法のいう、「これに類する脳機能の障害」の例として、「アスペルガー症候群」などが挙げられますが、どのレベルで脳機能の障害だといえるかということ、本当は分かっているのです。にもかかわらず、なぜか安易にポーンと脳障害という言葉が入ってきました。(pp. 31-33)

上記より、発達障害が定義されたのはごく最近であり、特に日本ではたった10年前にな

¹ 厚生労働省「知ることからはじめよう みんなのメンタルヘルス」
http://www.mhlw.go.jp/kokoro/know/disease_develop.html (最終閲覧日 2013/11/18)

² 平成16年成立、発達障害者と定義される障害者への支援について定めた法律。

³ 古くから知られた自閉症より高い知能レベルの自閉症の意。

されている。そして、そのような若い概念である上にその定義づけも曖昧である。中でも日本の定義では「脳障害」というよく分からない言葉が当てられている。これは、どんな対人障害も安易に「脳障害」の言葉に当てはめられ、発達障害としてラベリングされてしまうという危険性があることを意味する。さらに石川・高岡（2012）は以下のようにも述べる。

「特別支援」という言葉が生まれようとしていた1990年代、「特別支援学校」（それまでの養護学校）をなくしてみんなに普通教育を行う、という差別を取り去ったインクルージョンという方向性が文部省の一部に見えてきていました。（中略）現実には「発達障害者支援法」「特別支援教育」という言葉が出てきて差別は拡大されました。それまで普通学級にいたけれど障害児とみなされなかった子がいる。その子の個性的な部分を「支援する」という名前のもとに「特別支援学級」に特殊化し、発達障害児として送り出し差別化したのです。（pp. 30-31）

現在、「特別支援」の名のもとに『個性』のある子供が次々排除されていくという事態が起こっている。ここでいう「個性」とは、学習面や対人面など学校教育上必要な能力のことである。当初、国は「特別支援学校」という場所の別離を廃し、「特別支援学級」によって同一学校内での支援の別離をすることでインクルーシブ教育⁴を目指していた。その結果、それまで普通学級に属していた『個性』のある子供を次々発達障害児としてラベリングし、排除していくこととなった。国の目指したインクルーシブ教育が「分け隔てなく教育する」ことではなく「同一場所ではあるが『個性』に応じた別の支援をする」ことを志向したため、その「個性」によって生徒間に「違い」が生まれることは当然と言えば当然である。さらに、その『個性』のある子供が発達障害児としてラベリングされ、排除されることを後押ししたのは、他ならぬ「発達障害者支援法」による発達障害の曖昧な定義である。

これらから、発達障害児の排除のもととなる「違い」とは、「特別支援」を理想とする現在の学校教育により形成されていると推測される。そしてここでいう「違い」とは引用における「個性」のことに他ならない。学業面や対人面で多くの子供と「違い」、「個性」を持つと判断された子供が発達障害児となるのである。

1. 2 「違い」克服の鍵とは

ここまでで現在の発達障害児が持つ「違い」とは学業面や対人面での「違い」であり、法律と学校教育によって枠組みされているとわかった。ただ、現在増加しているはずの発達障害は施設による別離から支援の柔軟化によるインクルーシブ教育に移行しようとした結果であり、差別を減らそうとした結果ともいえるのである。これは、教育の場に限り「違い」を克服しようとするのがいかに難しいかを表す。以前のような歴然とした別離は論外であるが、現在の緩やかな差別も、これ以上学校という場で克服することは難しい。

⁴ 障害の有無によらず一緒に学ぶという教育のあり方。

例えば、筆者の弟（注：診断は受けていないが、話したり書いたりする文章が不自然、特に同年代とのコミュニケーションが苦手、など発達障害の特徴を持つ。2013年現在大学二年生。）は通常学級で他の級友と同一の教育を受けた。弟は中学生時、成績がクラス中位とさほど悪くなかった。その一方、国語や数学の文章題を理解することはどうしてもできなかった。文章の理解が苦手なのは発達障害の特徴である。成績が悪くないのであれば同一の場での教育も可能に思えるが、どうしてもできない部分があるのならば、個々に応じた支援もあるといい。その意味で「特別支援」もあった方がいいのだ。よって、「特別支援」の可否を述べることは無意味であり、それよりも、学校教育で全て解決しようとする姿勢を見直すべきである。つまり、「特別支援」の方針を正すというより、学校外での「違い」の克服を模索していくべきである。

ところで、学校教育に特徴的な活動は言語活動である。学校では、勉強、友人とのコミュニケーションと言語を主要ツールにしていることがとても多い。上で述べたように、発達障害児は文章理解を苦手とする。よって、学校教育外の「違い」克服の場所を考えるとときには、非言語の活動を考えていく必要がある。言い換えれば、言語活動を中心としない活動なら「違い」克服の可能性があるのではないか、と言える。非言語活動にも様々あるが、当稿では特に「違い」克服のカギとしてオーケストラを提示したい。その理由については、以下で詳しく述べていく。

2. オーケストラ

2. 1 オーケストラでできること

オーケストラとは日本語でいう管弦楽団にあたり、弦楽器、管楽器、打楽器を用いてクラシック音楽を演奏する楽団である。20人の小さな編成から100人の大編成まで規模は様々に存在する。それらに共通した特徴は、様々な楽器があってそれぞれに楽器や担当する楽譜が異なること、指揮者を中心として階層構造をなしていること、そしてその全員がある一曲を演奏することである。以上から考えると、オーケストラは、さながら一つの目標に向かって組織で突き進む会社のようにあり、社会の縮図のようでもある。「社会を知る」ことは、オーケストラの重要な役割なのではないだろうか。

オーケストラによって社会を知ることの出来る理由は、オーケストラが団体活動である点にある。山岸淳子「ドラッカーとオーケストラの組織論」（2013）にこんな一節がある。

組織理論によれば、楽器のグループごとに、グループ担当副指揮者が必要であり、その下に、楽器ごとの楽器担当副指揮官が必要である。（中略）情報化組織における主役は、専門家であって、トップ経営者でさえ仕事の仕方については口出しができない。指揮者はある楽器の演奏方法が分からなくても、その楽器の奏者の技術と知識を、いかに生かすべきかを知っている。これこそ、あらゆる情報化組織のリーダーが身につ

けるべき能力である。⁵

社会とは一般的に他人と共有する世界のことをいい、日本では「社会人」の語が示すように成人の世界、さらには会社を中心とした世界を意味することも多い。社会では上下関係や役職が階層となって表れているが、それがオーケストラにも表れているのである。言い換えるなら、社長はオーケストラにおける指揮者で、各楽器のパートはそれぞれ異なった事業部門、パートリーダーはその事業部のトップである。よって、オーケストラを通じて自然と社会の上下関係を知ることが可能といえる。

さらにオーケストラには、そうした会社会的社会よりももっと基礎的な社会を知る機能もある。「空気を読む」という言葉に代弁される、日常コミュニケーションの「空気」である。例えばある人が1人で自由に音を出しているとする。その人は1人で演奏するときとても気持ちがいいかもしれない。しかし、オーケストラの中で演奏したとたん、気持ちの悪い音楽になる可能性がある。他人の音を聴いていなければ気持ちのいいタイミングや音を出すことはできないのだ。他人の音に気付き、自分の音に気付くことで、その曲、その場の「空気」を知ることができる。幼少時からソロでヴァイオリンを習っていた人は、どれだけうまくてもオーケストラの他の人と合わせることが難しい、ということがある。団体であるオーケストラの中で、自分がいるのに適切なタイミングや音程を見つけること、それは「空気を読むこと」であるといえる。

そうやって次第にオーケストラという社会を理解してくると、音程やタイミングといった自他の役割の違いを理解し、自分の出す音に責任を感じるようになる。結果、オーケストラによって「自己表現」も可能になるともいえる。3章で後述するドラムサークルは単音かつ単一のリズム系であるが、オーケストラの利点は楽器が多いことである。つまり、他の楽器の音と自分の楽器の担当する音やリズムが違うという発見があり、それらがうまく噛み合った時に心地よさがあるという発見があるのだ。そういった自他の違いを見つけると、自分の音をよりうまくそこにはめようという責任が出てくる。音を出す必要性から、自分を他人に伝える、という経験を増やしていくことにより、自己表現が可能になっていくのだ。

また、楽器を演奏することそのものも自己表現の手段になりうる。ドロシィ・ミール、レイモンド・マクドナルド、デーヴィッド・J・ハーグリーヴズ編、星野悦子監訳「音楽的コミュニケーション—心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ」(2012)内では、歴史的に百を超える研究結果から、音楽で聴取した情動に関して①聴取者間の一致②正確さがみられる、ゆえに音楽は特定の情動を表現できるとしている⁶。音楽によってさまざまな情動の表現が可能ならば、言語表現を経なくても、豊かな自己表現をすることが可能なのだ。以上より、オーケストラが「社会を知り、自己表現を豊かにする」ツールであることが証明された。

⁵ http://www.lifehacker.jp/sp/2013/02/130226book-to-read_2.html (最終閲覧日 2013/12/19)

⁶ ドロシィ・ミール、レイモンド・マクドナルド、デーヴィッド・J・ハーグリーヴズ (2012)、pp.108-109

2. 2 発達障害児とオーケストラ

以上より、オーケストラが「社会を知り、自己表現を豊かにする」ツールであることを証明したが、なぜそのようなオーケストラが発達障害児の社会適応のためのツールとして有効なのか。発達障害児個人の変化から考えると、「社会を知り、自己表現を豊かにすること…①」は社会適応に不可欠な要素であるといえる。通常発達障害児はどこか不特定の「社会」、コミュニティに馴染むことを苦手とする。3章のドラムサークルの例で後述するが、こうした合奏は発達障害児が「社会を知り、自己表現を豊かにする」手助けになる。それは、オーケストラが音楽という非言語を媒介にしているからである。音楽を通して感覚的に学ぶことによって、社会の階層関係や読むべき「空気」を知り、自己表現を知ることができる。そうして、発達障害児は徐々に社会に適応できるといえる。

また、周囲を含めた社会の変化も考えると、今分けてくくられている「健常児／発達障害児」双方が対等なフィールドで学び、社会全体が成長することができる(…②)点もオーケストラの特徴である。このとき、「言語の社会／非言語の社会」の差異が大きなポイントといえる。1章では、学校教育が「違い」をうみ発達障害児をつくると述べた。その「違い」は言語コミュニケーションによって生まれていることも既出である。学校教育で発達障害児が適応できず、自己表現できない「社会」は「言語の社会」だ。それに対して、オーケストラは音楽という非言語コミュニケーションを媒介にして成立している。そこで生まれる「社会」は学校教育とは異なる「非言語の社会」であり、学校教育＝「言語の社会」で言語コミュニケーションによって存在していた「違い」は存在しなくなるはずである。よって、オーケストラ＝「非言語の社会」では、学校教育で健常児／発達障害児とされていた区別が取り払われ、音楽を通じたコミュニケーションが相互で可能になる。そうして、「健常児／発達障害児」双方が対等なフィールドで社会を学んでいける事もオーケストラの役割といえる。

3. 音楽療法

3. 1 音楽療法について

3. 1. 1 音楽療法の定義

実は、発達障害はじめ障害者の様々な困難削減のためのアプローチとして、既に音楽療法が存在する。音楽療法ではオーケストラを編成するわけではない。しかし障害者の社会適応を目的とする点では2章で述べたことと同一の方向性を持つ。これまでオーケストラの機能について述べてきたが、派生して音楽療法も調べるべきだろう。音楽療法は有効なのか、オーケストラにあって音楽療法にないものは何か。本章では、音楽療法について述べた上で、発達障害児の社会適応について2章と比較していく。まず、音楽療法の定義について、ジュリエット・アルバン(1969)の言葉を以下に引用する。

音楽療法とは、身体的・精神的・情動的失調を持つ成人・児童の治療、復帰教育、訓練に関する音楽の統制的な活用である。音楽療法は、音楽の機能でもあって、音楽そのものを目的としていない。それ故に、音楽療法の価値は、使われた音楽の種類にも、音楽的完成度にも関係しない。音楽療法の効果は、もともと音の人間に与える影響に由来している⁷。

音楽療法とは、簡単に言うと発達障害者・精神障害者・認知症患者等を対象に、音楽を媒介にして症状の改善を促す福祉の技法である。子供から大人、あらゆる障害から認知症までと対象は幅広く、療法によってどのような効果を期待しているかも様々だ。また、音楽療法は一般的な音楽の目標である「曲の完成」を目標としていない。従ってクライアント⁸には難しい音楽の知識や技術が要求されるわけではない。音楽は、あくまでツールとして用いられていることが分かる。上記より、音楽療法とは、音が人間に与える様々な影響を利用し、生活に困難のある人間の困難を解決していく治療法であるといえる。

3. 1. 2 日本における音楽療法の実際

では、日本では実際に音楽療法がどのように行われているのか、以下で詳しく述べていく。音楽療法の実践は音楽療法士によって行われる。音楽療法士は、クライアントの身体や精神に対して音楽を用いて働きかけ、またコミュニケーションをサポートすることが仕事である。仕事の場合は、福祉施設、医療機関、教育機関、家庭など多岐に渡る。使用する音楽もさまざまである⁹。日本では、「日本音楽療法学会」が音楽療法の資格を発行しており、音楽大学をはじめとする決められた学校やプログラム、さらに試験の受験を経て資格の取得をすることができる。現在日本では、2000余名の音楽療法士が活躍している¹⁰。

音楽療法と一口にいってもさまざまな種類、学説がある。ここでは大きく、心理学に基づく音楽療法 (A)、グループで行う音楽療法 (B)、医療現場で用いる音楽療法 (C) の3つに分類してそれぞれ説明する。(A) は、心理学の分野で既にある学説を音楽療法に応用させたものである。例えば、行動療法に基づいた音楽療法では「正しいことをしたときにご褒美をあげ、間違ったことをしたときにあげない、という行為を繰り返すと次第に問題行動がなくなっていく」という行動療法をベースにし、音楽ができたらご褒美、出来なかつたらなし、ということを繰り返して問題行動をなくしていく。また、ボニー式 GIM では、深層心理はイメージに表れるという学説をもとに、受動的に音楽を聴き、得たイメージから深層心理を自己自覚していく。これより (A) は、いずれも合奏するという手段を必要としないことがわかる。(B) は、しばしばグループで行い、社会性を構築するために用いられる。創造的音楽療法と分析的音楽療法との二種が該当するが、前者は音楽の非言語的な側面に着目しているのに対して、後者は合奏をした後でその合奏についてディスカッショ

⁷ 名古屋音楽療法工房 http://www.nagoya-music-therapy.com/about_musical_therapy.html (最終閲覧日 2014年1月7日)

⁸ 音楽療法士は治療対象者のことをこう呼ぶ。

⁹ 長坂希望(2012)「音楽療法士」、pp.32-33

¹⁰ 日本音楽協会 <http://www.jmta.jp/index.html> (最終閲覧日 2013/07/27)

ン・フィードバックをし、音楽を言語化することで、次第に自分のことを伝えることができるようにしていく。同じ社会性の構築を主眼としていても、音楽と言語に関するとらえ方が真逆であることがわかる。(C)は医療機関で医療と連携しながら行われている音楽療法で、神経学的音楽療法や認知音楽療法がある。前者は中枢神経や言語野に対して働きかけて機能を呼び起させ、後者は脳神経に働きかけて記憶を呼び起こさせるもので、いずれもリハビリに用いられる。そして音楽療法士はたいてい、いずれか1つの音楽療法を専門にし、老人ホームや医療現場など様々な場で活動していく。

3. 2 創造的音楽療法から考える

上では様々な音楽療法の種類を述べたが、特に当稿で着目したいのは(B)の創造的音楽療法である。それは、当稿では発達障害児の社会適応を目的にしており、対象・目的が最もよく合致するからである。以下では、創造的音楽療法について詳述し、1章をもとに特長と問題点を考察していく。

創造的音楽療法はポール・ノードフとクライヴ・ロビンズによって考案された音楽療法で、発達障害児を対象にしている。この音楽療法には、人間は生来音楽への反応があること、音楽をしたとき全人格が明確化されること、かつ音楽は知的過程を必要としないものであるという前提がある。そのため発達障害児は音楽をコミュニケーションツールとして用いることが可能であるといえる。よって、発達障害児同士、もしくは発達障害児と音楽療法士とが音と音で会話し、相互反応性を育てることが可能となる。

では、創造的音楽療法はどう実践されどのような効果が得られるのか、2013年10月、音楽療法士の鈴木玲子氏にお会いしてお話を伺った。鈴木氏によれば、創造的音楽療法の一つの方法として「ドラムサークル」があり、それは氏の最も好きな療法だという。ドラムサークルとは、ひとりひとつの打楽器を持ち、円になって即興演奏するものである。聴衆を必要としないこと、特別な音楽経験を必要としないことに特徴がある。音楽療法に限らず企業研修やリフレッシュ法としても取り入れられており、自己表現や相互理解のサポートとして用いられている¹¹。音楽療法でも行うことは基本的に変わらない。発達障害や知的障害の子供・大人が円になり、その中心で音楽療法士がリーダーとなって先導してドラムを叩く。それを真似してクライアントが各自のドラムを叩いていくというごく単純なセッション¹²である。しかし、例えば同一音価の音の連打という簡単なものから始めたとしても、最初は皆好きなように叩いて音同士なかなか合わない。だが次第に他人の音の存在に気付いていく。それを聴いて合わせてみると気持ちがいいということが判明し、ひとりひとりが能動的に他人の音に合わせていった結果、音が揃ってくる。それができるようになったら、音を小さくしたり、リズムを変えてみたり、リーダーをクライアントの一人に交代したりとセッションにバリエーションを持たせていく。そうしたセッションを通して、他者の存在の認知や相互理解についての体験をし、社会適応につなげていくのがドラムサークルである。

¹¹ ドラムサークルファシリテーター協会 <http://dcfa.jp> (最終閲覧日 2013/12/9)

¹² その場限りの合奏のこと。

ドラムサークルの例からわかるように、創造的音楽療法では、個々の音楽技量や演奏の完成度を問題とせず発達障害児の社会適応を促すことが可能である。2章と比較してみても、ドラムサークルは非言語活動かつ「社会を知り、自己表現を豊かに(…①)」するものといえるため、オーケストラと変わらない役割を果たすことができるといえるかもしれない。

しかし問題は、音楽療法では障害者のみをセッションの対象としているため、社会全体の成長(…②)が見込めないことである。健常者にとって社会が健常者のみで構成されているわけではないのと同じように、障害者にとっても社会は障害者のみで構成されているわけではない。今後発達障害児の社会適応の場をつくっていくなら、学校外であることはもちろん、音楽療法という福祉の場も脱していく必要があると推察する。このとき、健常児も巻き込むことが容易なオーケストラがヒントになるのではないだろうか。

4. エル・システマ

4. 1 エル・システマの概要

4. 1. 1 ベネズエラとエル・システマ

前章までは発達障害児の社会適応のためのオーケストラの必要性と、それに関連する音楽療法の説明を行ってきた。それらを受け、以下の章では、ベネズエラのオーケストラコミュニティであるエル・システマを参考に更なる論の補強をしていく。エル・システマについて述べる前にまず、エル・システマを生んだ国、南米・ベネズエラについて簡単に説明する。ベネズエラは南米の北端に位置し、アンデス山脈の北端にあるため気候はおだやかである。経済的には、1983年、対ドル交換レートが変更された「黒い金曜日¹³」以後非常に厳しい状況が続いている。その後は1989年の大統領カルロス・アンドレス・ベレスによる緊縮財政政策¹⁴とそれに伴うカラカス暴動¹⁵、IMFの介入¹⁶を経て、国民の半分が貧困層という国になった。そのため首都カラカスはランチョ¹⁷に取り囲まれ、人々は貧困と犯罪の危険に苦しみながら暮らしている¹⁸。こうした国で子供が安全に育つことが出来るとは考えにくい。

その子供が安全に育つのでさえ危ぶまれる国に、世界トップレベルのオーケストラと、それを支える優れた音楽教育システムが存在する。エル・システマは、無料で楽器を貸与

¹³ 石油輸出国であったベネズエラでは輸入品の安さで経済が支えられてきたが、通貨切り下げによってインフラが発生、石油特需が崩壊した。

¹⁴ 石油価格を二倍にすることを発表。それにより公共交通機関の10割近い値上げを招いた。

¹⁵ バスの値上げに対する学生・労働者の抗議に端を発した暴動。群衆はネオ・リベラリズムそのものへの反発を表し暴動は革命的な雰囲気まで高まっていたが、政府により弾圧された。死者は全国で三千人前後といわれる。

¹⁶ 社会福祉のカットと公共料金の値上げをする場合にのみ短期の融資をするという「財政パッケージ」。これにより景気そのものは回復するが、格差は拡大した。

¹⁷ 不法占拠の家々が連なる貧困地区。

¹⁸ 山田真一(2008)「エル・システマ—音楽で貧困を救う—南米ベネズエラの社会政策」、pp.20-40

し集団でオーケストラ教育を行うシステムである。参加する子供の数は 20 万人以上¹⁹で、ランチョから通う子供も少なくない。一方でエル・システムは世界ツアーを行い各国で高い評価を受けるオーケストラを持ち、そこから世界のトッププレーヤーを輩出している。筆頭である世界的指揮者グスターボ・ドゥダメルは、1999 年のシモン・ボリバル・ユースオーケストラ設立時にわずか 18 歳で首席指揮者に任命され、2004 年には第一回「グスタフ・マーラー国際指揮者コンクール」で優勝、高い評価を受けた。その後もニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団はじめ世界の名だたるオーケストラを指揮し「100 年に一人の天才指揮者」と呼ばれている²⁰。こうしたプレーヤーを育てる土壌をつくっているのが、エル・システムとそれを社会政策として位置づけ支える国家である。以下では、エル・システムの理念と組織体系について詳しくみていく。

4. 1. 2 エル・システムの組織と成立

エル・システムは、国立財団ベネズエラ児童青少年オーケストラシステム (FESNOJIV) による統括である。現在、首都カラカスをはじめ各都市に支部があり、今やベネズエラ中の子供にオーケストラの機会が提供されているといえる。料金は、楽器の貸出代を含め無料での受講が可能である。オーケストラは三段階であり、はじめの国立児童オーケストラは小中学生、ユース・オーケストラ²¹は中高生、国立シモン・ボリバル交響楽団はそれ以上と分かれている。ユース・オーケストラは奨学金が、シモン・ボリバル交響楽団では給与が支給される。なお、年齢の区切りは試験次第で飛び越えることができる。従って、年少児を持つ親にとっては無料かつ文化的な素養を学べる託児所であり、貧しい家の出身者にとっては、エル・システムで出世することで練習資金はもとより生活資金まで手に入れることができる、という仕組みになっている。また、ユース・オーケストラ以上は現在精力的に海外公演をこなし各国から高い評価を得ている。

ではなぜベネズエラのような、クラシックとは一見遠そうな南米の貧困国でエル・システムが生まれたのか。意外にもエル・システムの始まりは今のような福祉のための組織ではなかった。それは 1930 年代にまで遡る。ベネズエラは 1930 年代以降豊富に採れる石油の輸出を背景に成長したため、庶民の生活が豊かだった時代があった。そのため奢侈な芸術を受け入れる基盤があったのである。クラシック音楽も例外ではなく、外国人奏者の招致によって度々演奏会が開かれ、文化として消費されていった。そして 1970 年代、ベネズエラの子供でオーケストラをつくろうと考えた人物が現れた。ホセ・アントニオ・アブレウである。アブレウは、祖父が子供のための吹奏楽団を運営していたこと、自身の小さい頃のオーケストラへの情熱、そして、ベネズエラ人によるオーケストラを作るという情熱から、現在のシモン・ボリバル・ユース・オーケストラの母体となる国立ユース・オーケストラを設立した。初期のオーケストラは人数も足りず演奏レベルも物足りないものだった。それでもアブレウの情熱に人々は賛同し、ユース・オーケストラは次第に規模を大き

¹⁹ 山田(2008)、p.9

²⁰ 山田(2008)、p.281-290

²¹ 現在国立のものは、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ、テレサ・カレーニョ・ユース・オーケストラがある。

くしていく。1979年、ある程度規模を整えたユース・オーケストラは、日本から小林武史を招致する。小林はオーケストラに日本のスズキ・メソッドを取り入れ、エル・システマを現在のような教育機関に整えた。スズキ・メソッドの教本と指導ノウハウの輸入により、高い水準で子供の演奏技術を伸ばすことができる組織になったのである。

そうして80年代までのエル・システマは、ベネズエラの子供たちのためのオーケストラをつくるという希望のもとに進んでいったが、時代が下って1989年のカラカス暴動をきっかけとして、新たな方面に発展することとなる。それまでの情熱と勢いに加えて、ベネズエラ社会全体の受け皿として、社会福祉の方向に発展することになったのだ²²。現在のエル・システマの理念は、以下のとおりである。

1. すべての人が経済的事情を懸念することなく、音楽にアクセスできることを保障
2. 集団（オーケストラ）での音楽活動を通じ、コミュニケーション能力を高める
3. 社会規範と自己の個性の表現を両立することを、音楽体験を通じて学ぶ²³

ここで興味深いのは、エル・システマが、音楽を単なる癒しや不思議な力のあるものとして捉えているのではなく、集団行動を学ぶためのもの、かつ自己表現の手段として捉えている点である。上記から、エル・システマは、貧困層を含めた全てのベネズエラの子供に音楽の機会を保証し、それにより犯罪や非行を防ぐこと、団体でのコミュニケーション能力を身につけさせることを主眼としていることがわかる²⁴。

4. 2 エル・システマから考える

上記よりエル・システマは、オーケストラを「社会を知り、自己表現を豊かにするもの」であるとしており、貧しく治安の悪いベネズエラにおいても、子供に社会で生きる力を身に付けさせるという機能を果たしていることがわかった。音楽を通して「社会を知り、自己表現を豊かにする」という考え方は2章より既出である。ただ、違いは、エル・システマが「すべての人」に音楽へのアクセスを保証している点、成立からわかるように福祉サービスを中心とした団体ではないという点にある。いくら社会適応を目指していようと、障害者を対象とし、障害特性であるコミュニケーション力の機能向上という面を持つ音楽療法では、障害者の排除そして「違い」の克服にはならない。福祉は現実的には弱者に限って支援する業界であり、「インクルージョン」でなく「区別して支援」という、第1章で述べた教育の事例と同じ方向性を持つからである。その点、エル・システマのように、福祉でない団体がすべての人にオーケストラを保証する、言い換えれば民間団体によるオーケストラのインフラ化こそが、真の意味でのインクルージョンの可能性を持つのではないか。

オーケストラのインフラ化という言葉を出したが、そのイメージについて、2013年9月、

²² 山田(2006)、pp.96-218

²³ KAJIMOTO 「世界が注目する人材教育『エル・システマ』」
<http://www.kajimotomusic.com/jp/artists/k=112/> (最終閲覧日 2013/07/28)

²⁴ 山田(2006)、p.11

ベネズエラ出身で日本在住のヴァイオリニスト、パウル・エレラ氏にインタビューした内容から考察していく。先に述べたように、ベネズエラでは国中にエル・システムが広がっており、国中の子供がオーケストラにアクセスできる状況にある。現在はベネズエラ政府も、社会福祉事業としてエル・システムを後援している。通常、オーケストラは敷居が高いもので、日本でもオーケストラ人口はごく限られたものである。だが、ベネズエラは貧困国であるにもかかわらず、オーケストラをインフラとして当たり前の環境のように整備することに成功しているのである。なぜそのようなことが成功しているのか。エレラ氏によれば、その環境は、ベネズエラに日本ほど子供の自己表現の選択肢がなく、むしろエル・システムしかないゆえにできたものだという。日本にはピアノ、水泳、書道など習い事が豊富にあり、国民も時間的・精神的にそれを享受する豊かさがある。一方でベネズエラは貧困や治安の悪さと様々な問題を抱えるため、そういった娯楽寄りの社会資本は発達しづらい。国の背景が大きく異なるため、オーケストラの広まり方について単純に比較することはできないのである。ただ、エル・システムではオーケストラを「社会を知り、自己表現を豊かにする」ためのツールと捉えている。世界の多くの国において、オーケストラというコンテンツは、オーケストラ好きの人が自ら選択して楽しむ対象である。そうでなく、子供が「社会を知り、自己表現を豊かにする」ことを目的にすること、その前提として、障害児を含め多様な人の存在する「社会」をつくるためには、自ら選ぶものとしてのオーケストラを脱し、ベネズエラのようなオーケストラのインフラ化を行うことが必要であると推測する。

以上により、エル・システムは、非福祉団体である民間そしてのちには政府が、オーケストラを誰でもできる環境を整備し、インフラ化した点に長所があるといえる。インフラとなることで、オーケストラは「選ばれる」奢侈品であることから脱し、はじめて子供が平等に「社会を知り、自己表現を豊かにする」ことができる場所となるのだ。

4. 3 日本で行うエル・システム

以上でエル・システムが決定的に音楽療法と異なるのはオーケストラをインフラ化した点であると述べたが、ベネズエラを参考にする上で忘れてはいけないのが、国の違いである。ベネズエラと日本では国の背景が大きく異なる。そのため、エル・システムのノウハウを単純に日本で応用することはできない。では、日本という国を考えた時にどのようにエル・システムを適用できるのか。日本の相馬市で行われているエル・システムジャパンを参考に考えていく。以下はエル・システムジャパン理事、網島亨氏へのインタビューを元に論ずる（2013年9月）。

エル・システムジャパンは、2012年に創設された一般社団法人である。創設は、2011年の東日本大震災を受け、被災地の大勢の子供でできる活動はないかと考えられたのがきっかけだった。災害が起こると真っ先にないがしろにされるものは芸術である。また、災害が起こった時、街の復興と同時に人が自立することが重要になる。みんなで震災を乗り越えるため、大勢でできる芸術をと考えられたのがオーケストラだった。媒体としては何でもよかったのだが、1つのものを100人もの規模で作る媒体としてオーケストラが最適だったからだという。そして、相馬市とも連携しながら、エル・システムの理念に基づいたエ

ル・システムジャパンが作られた。1から作られたベネズエラのエル・システムと異なり、相馬市のエル・システムは小学校の部活支援をベースにしている。相馬市はもともと器楽部など音楽活動の盛んな地域であり、当初は楽器修繕や指導者の招致から始まった。2013年4月、6年生の卒業をきっかけに週末弦楽器教室を開催。2013年9月現在、週末弦楽器教室の規模は総勢90人にまでなっている。将来的には相馬の子どもオーケストラの設立、さらには全国にエル・システムジャパンの活動を広げていくことを目標としている。

ベネズエラと日本との違いはなんとといっても貧富の差、治安の良し悪しの差、そして子供が享受できる放課後活動の数の差である。網島氏は、日本のエル・システムはベネズエラのものノウハウを利用しているだけで、設立背景も内容も全く別物だという。そのためベネズエラと日本の違いからくる挫折はないそうだ。とはいえ、金銭面も、媒体の数を考えても、自分のやりたいことができる日本である。各子供が選択した結果、媒体の数だけ子供が分散してオーケストラのインフラ化は難しいように思える。だが、実際に相馬市の試みは90人もの規模になり成功している。習い事のひとつと考えそこまで気を払っていない親御さんも多いそうだが、「楽しそう」「おもしろそう」となんとなく人が集まってくるのが大事なのだと網島氏は言う。

内容が違うとは述べたが、具体的には何が違うのだろうか。エル・システムジャパンもエル・システムの理念を応用している。ベネズエラが金銭的に貧しい子供であるのに対し、日本は被災地の子供と対象は違うが、子供の心を豊かにし、社会性を養うことを目的としている点では同一である。子供の心を豊かにし、社会性を養うためには、オーケストラを社会性向上のための媒体と捉えること、インフラ化し、コミュニティとして機能させることが必要となる。ただ、ベネズエラのエル・システムには託児所の意味合いがとても強い。安心して子供を外で遊ばせられない環境下で、無償で子供の面倒を見てくれる、さらには芸術をやらせてくれるというのは大きな利点である。それに対して日本では、音楽をやることは、子供の人生を豊かにするものではあっても、今ある生活に付加価値として「つけたらいい」ものにすぎないだろう。従って、相馬市の弦楽器教室のように、週末の1日の開催にとどまるくらいがよいと推測される。また、託児所ではないから、前述のとおり、そこまで熱心に通ってこない家庭も多くいる。開催頻度を下げて、自由な参加に寛容になることが日本にエル・システムを適用する際に考慮すべきことなのではないか。

エレラ氏も、日本にいずれエル・システムのような子供のためのオーケストラを作りたいと話していた。ベネズエラも日本も、オーケストラが心の拠り所となることができる点ではかわりない。オーケストラよりもゲームが子供に人気があるのは、その機会が整備されていないことも大きな原因であるという。まずは、どんな国にせよ、アブレウがエル・システムを作ったように、エル・システムジャパンが作られたように、頭になる人がいて、一歩を踏み出すことが不可欠なのだ。

5. 発達障害児の社会適応とオーケストラ

以上の章を踏まえて、以下では、オーケストラを用いた発達障害児・健常児間のコミュ

ニケーションの有り方について考える。筆者は2章で、発達障害児の社会適応のツールとしてオーケストラを用いる理由を、非言語の音楽を媒介にして「社会を知り、自己表現を豊かにする」ことができる(…①)こと、今分けてくくられている「健常児／発達障害児」双方が対等なフィールドで学び、社会全体が成長することができる(…②)ことであると記した。音楽療法でも①が達成されたが、オーケストラは①、②双方を満たすツールといえる。さらにエル・システムより考えると、オーケストラはインフラ化されることで②のような社会を作りうるといえる。従って、発達障害児の社会適応には、熱意のある民間が主体となって設立され、障害・非障害にかかわらず参加でき、演奏の巧拙でなくその「社会を知り、自己表現を豊かにする」過程が重視されたオーケストラがつくられることが有効であると結論付ける。

しかし、オーケストラは、本当に発達障害児の社会適応の助けになるのか。具体的に考えてみたい。まず、4章で扱う「エル・システムジャパン」という子供のためのオーケストラをサポートする団体より、教育理念を引用する。

家庭の事情にかかわらずなく、希望するどの子どもも楽器の演奏や歌うことを、グループで学んでいけるということ。それは芸術を通して自己を表現し、仲間と一緒に創造の喜びを知ることです。そして、一人一人の子どもが、誇りと自信を持っていきいきとすることで親が変わり、その周りの人々も変わって、社会が変革されていくこと、こうしたエル・システムの教育理念²⁵

引用の「家庭の事情にかかわらずなく、希望するどの子どもも」の字句は、当然発達障害児も含むであろう。また、その目標は「芸術を通して自己を表現し、仲間と一緒に創造の喜びを知ること」であると明示されている。グループで音楽をして、自己表現することが目標であるならば、通常あるようなオーケストラが「敷居が高いもの」であり「完成したもの」とする考え方はナンセンスといえるのではないか。完成を目標としないオーケストラ、その過程を目標とするオーケストラであればそもそもの才能は不問であるはずである。そして、「一人一人の子どもが、誇りと自信を持っていきいきとすることで親が変わり、その周りの人々も変わって、社会が変革されていく」とは、発達障害児を取り巻く環境にこそ言える。1章の「排除」の起こっている社会が変革されることが、発達障害児の社会適応とほぼ同義であるからである。発達障害児が社会に適応することは同時に社会が発達障害児に適応することも意味する。このために通常学級／特別支援学級という「違い」を乗り越えたかったのだ。「違い」のないオーケストラでともに過ごすことで、発達障害児の誇りと自信を得られ、社会も発達障害児に寛容になるというような相互作用が生まれる。これより、この理念上では発達障害児も参加可能であるといえると推測される。

字句の上では発達障害児を包括しうるエル・システムの理念ではあるが、網島氏は、発達障害児の参加は難しいと言っていた。じっとしていることが難しかったりすると、オーケストラの指導者に加えてその子への支援が必要となるからという。確かに非言語コミュニティであるオーケストラは現にある障害／非障害の区別をなくすものでありうるとは述

²⁵ エル・システムジャパン <http://www.elsistemajapan.org/> (最終閲覧日 2013/12/16)

べたが、それでもバリアはどこかで生じるかもしれない。しかし支援を付加することがオーケストラの邪魔になるかという点と全くそうでない。アメリカの ADA 法では障害者が望めば入学や就職に介助をつけることができる。それは障害者が健常者に比して不自由な生活をする上での当たり前権利とみなされている。日本の大学でも近年ノートテイク²⁶や移動介助など、障害学生の自立支援の動きは広がっている。できないことが他人の介助でできるようになるならばそれも自立に含まれるという考え方である。よって、指導者が増えることで発達障害児が参加できるなら、それは甘えでなく自立である。そうした補助員を積極的に増やしていくことで、参加にバリアの少ない環境を整えるべきである。

では、実際に発達障害児個人の社会適応を目指すならどのようなことを考えていくべきか。まず、うまく演奏することや完成を目標にしないことは大前提である。なぜなら、ここで志向するのは、発達障害児含めた子供が自己を表現し、相互を認め合うという過程を重視したオーケストラだからである。そしてその上で個々人が、他人の音の存在に気付き、聞き、自分はどのようなテンポや音程で演奏したら良いのかを少しずつ知っていくことが重要だ。そうすることで、他人や社会の存在を認識し、自己表現・社会適応へのステップを踏めるのである。この気付きは言語活動ではなく感覚のものなので、発達障害児に易しいといえる。

ただ、言語が苦手だから非言語が得意という意味には全くなならない。そのため個人によっては楽器を弾くことそのものが難しいかもしれないという懸念は拭えない。確かに発達障害児は芸術面で秀でている場合が多い。だがそれは一般論でしかなく、芸術的センスが皆無の筆者の弟を筆頭に反例はいくらでもいる。むしろ、自身の小中高時代、級友が音楽を得意か否かには大きな個人差があったことを思い返すと、発達障害児にも音楽の得手不得手に個人差があると思うのが妥当である。況してや当稿ではオーケストラに限定しているため、楽器の演奏は簡単ではない。いくらうまさよりも他人や社会の気付きといった過程を重視しているといえ、参加を諦める必要がある時はあるかもしれない。しかし 2013 年 12 月現在筆者がしている子供の職場体験テーマパークのアルバイトでは、保護者がその体験と子供の年齢、能力を比較して不安がっても、工夫次第でできないことはないからとにかく参加させてみる、という姿勢を基本にしている。もしかしたらできるかもしれないし、体験を経ると大きな楽しさが生まれるかもしれないからだ。「できないから」とやめてしまっ、得られたかもしれない楽しさを得られないよりは、とりあえずやってみることも重要である。

また、実際にそのようなオーケストラを作る段になると、これには費用と公的機関の協力が不可欠である。楽器をすべて揃えられるくらいの資金の存在もしくは寄付願いの労力、地区の子供への告知によりインフラ化を行うため、また場所をつかうための公的機関への協力申請、法人格の取得、それらをすべて行うだけのバイタリティが必要になる。この点こうした経過を経たエル・システムジャパンはとても稀有な存在であり、実現できるかどうかは、頭になる人にどれだけ推進力があるかが重要であるということがわかる。従って、発達障害児の社会適応のためのオーケストラを強く志向する人が現れない限り実現は難しいが、障害・非障害いずれにとっても居場所であるような「オーケストラ」がつけられ、

²⁶ 聴力障害の学生向けに、支援者が授業中のノート取りを代行すること。

音楽を通して障害・非障害間のコミュニケーションができること、そして発達障害児の社会適応と社会の発達障害児への寛容が同時に達成されるべきである。

おわりに

以上より、発達障害児の壁は言語にあると仮定して、教育機関を離れた場所、それもオーケストラで健常児との「違い」を乗り越えたコミュニケーションが可能になると結論づけた。インフラ化の必要性を説いたためその実現はかなりの夢物語になってしまったが、理想としてはそうしたオーケストラの実現、現状では今あるエル・システマジャパン（または音楽療法）の発展を願うのみかと感じた。また、音楽療法の範囲内での実施事例はあるものの、実際にオーケストラでそうした試みは行われていないため、発達障害児の社会適応が可能であるかどうかは、エル・システマの理念からの推測の域を出ていない。いつかぜひ、小さい規模でもオーケストラを通じた障害・非障害の交流を実現して裏付けを得てみたい。

ただ、仮に学校以外の居場所を形成できても懸念はある。筆者の弟は通常学級で育ったと述べたが、幼少時には分け隔てない、障害・非障害のコミュニケーションがとれていた。環境がわかれていず、周囲も寛容だったのである。しかし、幼稚園から小学校低学年まで仲良くしていたように見えた友達が、思春期になり弟にいじめをするようになった。このように、たとえ幼少時から一緒に過ごす「場所」があっても、成長とともに非寛容になっていく可能性は否めない。従って、オーケストラで「居場所」をつくったところで社会がどこまで寛容になるかはわからないのだ。

また、今回考えたオーケストラは巧拙を問題にしないと記したが、レベルの高いオーケストラを目指したい人はどうしたら良いのか、という問題も発生する。ベネズエラにもすでにユース・オーケストラとプロオーケストラと、上の段階のオーケストラがあるが、「うまい人はうまいオーケストラに行けばいい、ここではみんなで作る」と割り切りすぎると、ゆとり教育の問題点と指摘されて久しい、徒競走の「みんなでゴール」のような世界になりかねない。この場合、発達障害児が芸術センスに長けていて健常児とされている子にセンスがないときがあるとすると、演奏の巧拙によってまた新たな障害児が発生する可能性もないともいえない。

上のように、星の数ほどいる発達障害児、そして健常児を一括りにして話しているので、実際に彼らがどのように動くのかは推測の域を出ることができない。しかし、筆者の原点にはあるひとつの記憶がある。ピアノを習いたての幼少時の弟が、ピアノを弾くどころかレッスン部屋中をかけ回ってしかいなかったのに、壁とピアノの往復のたびに鍵盤を一音叩かせるようにしたところ、次第にピアノを叩く割合が増え、ついにはピアノを座って弾けるようになったという記憶である。音楽は言葉よりも雄弁に語りかけ、人に影響を与える。後に小学校で金管クラブという団体活動を3年間立派にやりきった弟を考えると、音楽を通してなら、発達障害児がこれ以上悲しまない社会をつくることができると信じている。

参考・引用参考文献

- 石井哲夫「自閉症児の心を育てる―その理解と療育」明石書店、2002
- 石川憲彦・高岡健「発達障害という希望―診断名にとらわれない新しい生き方」雲母書房、2012
- 稲田雅美「ミュージックセラピー―対話のエチュード」ミネルヴァ書房、2003
- エル・システムジャパン <http://www.elsistemajapan.org/>（最終閲覧日 2013/12/17）
- 国立音楽大学音楽研究所音楽療法研究部門「音楽療法の現在」人間と歴史社、2007
- 清水貞夫「インクルーシブ教育への提言―特別支援教育の革新」クリエイツかもがわ、2012
- ジュリエット・アルバン（櫻林仁訳）「音楽療法」音楽之友社、1969
- 鈴木敦史「不思議な国のクラシッケー日本人のためのクラシック音楽入門」青弓社、2012
- 鈴木文治「排除する学校―特別支援学校の児童生徒の急増が意味するもの―」明石書店、2010
- 津田英二「物語としての発達／文化を介した教育―発達障がいのある社会モデルのための教育学序説」生活書院、2012
- 土岐邦彦「ラフ・ラブ・ライブ―障害をもつ若者たちの発達と演劇」全国障害者問題研究会、2011
- トリシア・タンストール（原賀真紀子訳）「世界でいちばん貧しくて美しいオーケストラ―エル・システムの奇跡」東洋経済新報社、2013
- ドロシィ・ミール、レイモンド・マクドナルド、デーヴィッド・J・ハーグリーヴズ編、星野悦子監訳「音楽的コミュニケーション―心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ」誠信書房、2012
- 長坂希望「音楽療法士 シリーズ<わたしの仕事>①」新水社、2012
- 中島隆信「障害者の経済学」東洋経済新報社、2011
- 日本音楽協会 <http://www.jmta.jp/index.html>（最終閲覧日 2013/07/27）
- ポール・ノードフ&クライヴ・ロビンズ（林庸二監訳）「障害児教育におけるグループ音楽療法」人間と歴史社、1998
- 堀利和「共生社会論―障がい者が解く『共生の遺伝子』説―」現代書館、2011
- 牧野俊浩「音楽セラピーのすすめ」エイデル研究所、1999
- 山岸淳子「ドラッカーとオーケストラの組織論」PHP新書、2013
- 山田真一「エル・システム―音楽で貧困を救う 南米ベネズエラの社会政策」教育評論社、2008
- 若尾裕「音楽療法を考える」音楽之友社、2006
- 渡辺一史「こんな夜更けにバナナかよ」北海道新聞社、2003
- Committee on the promotion of EYOC Japan tour「エル・システム・ユース・オーケストラ・オブ・カラカス 日本ツアー 公式パンフレット」2013